神戸新聞 2015年05月16日 土曜日 面名 健康 １３ 11ページ

月調査へ無人機開発

探究する人

宇宙探査工学者の吉田和哉さん（上）

新たな挑戦

民間による月面探査一番乗りを競う国際コンテストに、日本の探査車「ムーンレイカー」が参加している。チームの開発責任者は吉田和哉・東北大教授(54)。来年後半に月に向かう予定だ。

無人探査機を月に着陸させ、そこから500㍍以上走行し、高解像度の動画や写真を地球に送るというルール。米グーグルが出資、賞金総額は3千万㌦。世界から20チーム近くが参加している。

月探査車「ムーンレイカー」と、開発責任者の吉田和哉・東北大教授（左から２人目）＝２月、東京都江東区の日本科学未来館

よしだ・かずや　1960年東京都生まれ。84年東京工業大を卒業、86年東工大助手。95年東北大助教授、2003年から現職。

地球からの遠隔操作で信号のやりとりに時間差がある中、高温の砂地を移動できるかが成功の鍵となる。「想定外の事態にも対応する必要がある」と吉田さん。車体が軽く周囲を360度撮影できるカメラを搭載したムーンレイカーは、1月にコンテスト主催者から「中間賞」を受賞した。性能が認められ、優勝候補の一つに選ばれたことを意味する。

吉田さんが参加を決めたのは2010年。月着陸船を開発する欧州のグループに誘われ、合同チームを作った。取り組んできた人工衛星やロボットの技術を使った新たな挑戦だった。

11年には探査車の試作機が完成し、試験を繰り返した。だが13年、資金難や開発遅れを理由に欧州グループが撤退。それでも吉田さんらは新チーム「HAKUTO（ハクト）」を立ち上げ、開発を続けた。「信頼性の高さは他に負けない自信があった」

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

名　前【　　】

① 日本の探査車「ムーンレイカー」は、どんなコンテストに参加していますか？そのルールを書きなさい。

② このコンテストの成功の鍵は、どのようなことですか？そのことがわかるところに線を引きましょう。

③ ムーンレイカーが、1月に「中間賞」を受賞しましたが、なぜですか？認められた性能を2つ書きなさい。

④ この記事を読んだ感想をましょう。

学びポイント

月探査は、1960年代に始まりましたが、その後どのような経過をたどっているか、調べてみましょう。

NIEワークシート／中学生～高校生／理科、朝NIE